

明日につながる神意

丸山 勉

【聖書】創世記 40 章 7～23 節

ヨセフは主人の家の牢獄に自分と一緒に入れられているファラオの宮廷の役人に尋ねた。「今日は、どうしてそんなに憂うつな顔をしているのですか。」「我々は夢を見たのだが、それを解き明かしてくれる人がいない」と二人は答えた。ヨセフは、「解き明かしは神がなさることではありませんか。どうかわたしに話してみてください」と言った。給仕役の長はヨセフに自分の見た夢を話した。「わたしが夢を見ていると、一本のぶどうの木が目の前に現れたのです。そのぶどうの木には三本のつるがありました。それがみるみるうちに芽を出したかと思うと、すぐに花が咲き、ふさふさとしたぶどうが熟しました。ファラオの杯を手にしていたわたしは、そのぶどうを取って、ファラオの杯に搾り、その杯をファラオにささげました。」ヨセフは言った。「その解き明かしはこうです。三本のつるは三日です。三日たてば、ファラオがあなたの頭を上げて、元の職務に復帰させていただきます。あなたは以前、給仕役であったときのように、ファラオに杯をささげる役目をするようになります。ついては、あなたがそのように幸せになられたときには、どうかわたしのことを思い出してください。わたしのためにファラオにわたしの身の上を話し、この家から出られるように取り計らってください。わたしはヘブライ人の国から無理やり連れて来られたのです。また、ここでも、牢屋に入れられるようなことは何もしていないのです。」料理役の長は、ヨセフが巧みに解き明かすのを見て言った。「わたしも夢を見ていると、編んだ籠が三個わたしの頭の上にあります。いちばん上の籠には、料理役がファラオのために調えたいろいろな料理が入っていましたが、鳥がわたしの頭の上の籠からそれを食べているのです。」ヨセフは答えた。「その解き明かしはこうです。三個の籠は三日です。三日たてば、ファラオがあなたの頭を上げて切り離し、あなたを木にかけます。そして、鳥があなたの肉をついばみます。」

三日目はファラオの誕生日であったので、ファラオは家来たちを皆、招いて、祝宴を催した。そして、家来たちの居並ぶところで例の給仕役の長の頭と料理役の長の頭を上げて調べた。ファラオは給仕役の長を給仕の職に復帰させたので、彼はファラオに杯をささげる役目をするようになったが、料理役の長は、ヨセフが解き明かしたとおりに木にかけられた。ところが、給仕役の長はヨセフのことを思い出さず、忘れてしまった。

【序】 苦しみに中いるヨセフ

「ヨセフ物語」の続きを今日もご一緒に味わってゆきたいと思います。来週はもう8月に入りますので、もしかしたら創世記を離れて「平和」のテーマでお話をさせて頂くことも考えています。今日は創世記の40章を中心に見てゆきたいと思います。今ヨセフは監獄の中におります。39章にある、ポティファルの妻の策略にか

かり、濡れ衣を着せられているからです。けれども、ヨセフはその監獄の中で、看守長に認められ、囚人の世話を任せられるまでになっているのです。しかしまだ青年のような若いヨセフです。自分が監獄に入れられていること自体、不条理で受け入れ難い現実であったに違いありません。現に、今日の 40 章の中で、彼は囚人となった二人の人の解き明かしをするのですが、その内の一人にこう言っています。

「あなたは以前、給仕役であったときのように、ファラオに杯をささげる役目をするようになります。ついては、あなたがそのように幸せになられたときには、どうかわたしのことを思い出してください。わたしのためにファラオにわたしの身の上を話し、この家から出られるように取り計らってください。わたしはヘブライ人の国から無理やり連れて来られたのです。また、ここでも、牢屋に入れられるようなことは何もしていないのです。」

ヨセフは苦しんでいたのですね。彼は神様を信じています。それでも、何故今、自分がこんなことになっているのか、神様のご計画が見えない、という苦しみの中にいたに違いありません。それで、その場の知恵を用いて、あわよくばここから抜け出る道を得たいと思った訳です。しかし、そう簡単にはいかなかったというのが今日の 40 章の結論の言葉です。「ところが、給仕役の長はヨセフのことを思い出さず、忘れてしまった。」と。人間の思惑の挫折と言っても良いでしょう。

[1] 信仰者と苦しみ

私たちは、信仰を持ったら全てのことはハッピーに進むと考えたいと思います。けれども、聖書はそういうことは保証してはいないのですね。信仰者であっても、やはり苦労はするのです。逆に言うならば、人生で苦しい目に遭ったり、やりきれない出来事に遭遇しても、それはあなたが不信仰の故、などということは絶対に言えません。それは、正にこのヨセフのことを見ても分かりますし、誰よりも、イエス様ご自身、そのご生涯はお苦しみの連続だったではありませんか。

私たちの人生が「こんな筈ではなかった」とか「一体この状況はどんな意味があるのか分からない」ということを通される時、そういう時こそ、神様に信頼する時、神様に聴こうとすべき時なのではないか、と思わされます。ある意味、「答えがすっかり見えている」とか「もう左うちわで良い」と思ってしまったら、人間は神様を求めようと思わないと思うのです。「答えが良く分からない」ということは、悪いことではないのではないのでしょうか？

ヨセフも今、自分がここに置かれているその本当の意味を測りかね、しかし彼は自暴自棄にならず、神様に尋ねながら、そのところで導かれた関わり（人間関係）に誠実に生きていたと思います。ですから彼には、ある意味、冷静さと余裕があったと思います。それが、この言葉に表されていると思いました。40 章 7 節です。

—「ヨセフは主人の家の牢獄に自分と一緒に入れられているファラオの宮廷の役人に尋ねた。「今日は、どうしてそんなに憂うつな顔をしているのですか。」

この問いかけこそが、次のステップに繋がる出来事の始まりです。彼は、獄中にありながら、他の囚人の様子を心に留め、心配しているのです。

そしてヨセフは、この役人たちが夢を見て、その夢の意味が分からないので憂鬱な気持ちになっていたことを知り、「どうぞ話して下さい」と二人に言います。ヨセフには、夢を解き明かす特別な賜物が、神様によって与えられていたからです。

[2] 「夢」とは、神様のご計画の示し

その時のヨセフの言葉がとても大切な意味を持っています。彼は、夢を解き明かす際にこういいました。—「解き明かしは神がなさることではありませんか」(8 節)。そうなのですね、彼は、「自分が自分の力で解釈してあげる」とは全く思っていないのです。ですから、これはいわゆる占いではありません。「解き明かしは神がなさること」。この思いは、彼は徹底していました。次の 41 章では、王ファラオの夢を解き明かす場面が出てきます。その中でこのようなやり取りが記されています。41 章 15～16 節です。

「ファラオはヨセフに言った。「わたしは夢を見たのだが、それを解き明かす者がいない。聞くところによれば、お前は夢の話聞いて、解き明かすことができるそうだが。」ヨセフはファラオに答えた。「わたしではありません。神がファラオの幸いについて告げられるのです。」——彼は自分の限界を知っていました。夢を解き明かすというのは、自分ではなく、神様の仕事なのだ、私はそれに仕えている「道具」に過ぎないのだ、と。ヨセフはファラオの前でも堂々とそのように言いました。これはヨセフの「証し」に他なりません。「自分ではなく、神様」。この「立ち位置」が彼を救うことにもなるのです。

40 章で、ヨセフは二人の役人（給仕役の長と料理役の長）の夢を解き明かしています。先ほど読んで頂いたとおりですが、皆様、この場面をお読みになってどのように思われたでしょうか？ 給仕役の長が見た夢について、ヨセフは、あなたは三日経ったら、ファラオがあなたの頭を上げて、もとの職務に復帰できます、と希望のある解き明かしをしましたね。これは聞く方も嬉しいことでしょう。だから話す方も楽です。けれども、もう一人の料理役の長が見た夢については、残酷なことを語るなければなりません。三日経ったら、あなたはファラオに殺され、木に吊るされてしまうと。この前の水曜日の祈祷会の時もお話したのですけれども、もし私がヨセフの立場だったら、給仕役の長の方は良いとしても、料理役の長の方にはこんなことを語るだろうか、と思いました。祈祷会で一緒だった I さんにもお尋ねしました。私と同じ、そのまま言うのは難しいのではないかと、という感じで

した。死刑判決を自分が告げるに等しいような事になります。人間的には言葉を濁したくなります。…このことに触れている注解やメッセージを私自身は殆ど知らないのですが、この部分が、私は心に引っかかったと言いますか、考えさせられたのです。ヨセフは、給仕役の長にも、料理役の長にも、**そのまま話しをした**という事。

しかし、ここの所に、ヨセフがどこに立っているのかが明確に示されているのではないかと、今回読んでいて思いました。彼にとって、寝ている時に見る「夢」とは、**神様の神意(みこころ)の示しに他ならなかった**のですね。その意味で、彼は自分が神様からの特別の才能・賜物を預かっている、という確信があったのだと思います。彼の素晴らしい点は、それを、神様のメッセージを伝える以外の目的に使ったりするとか、それに付け足したり、省いたり、脚色・改竄するようなことは全く考えていないということです。**自分はどこまでも、神様に用いられる道具**。ですから、時には冷酷な内容もそのまま言わなければならない。辛いことでしょう。でも、彼はそれを真っ直ぐに語る。「もう少し配慮のある言い方もあるのではないか」と思ってしまいがちですが、それは現代の私たちの見方なのかもしれません。ヨセフは神様の言葉に把えられ、そこから逃げていない。そういうことではないでしょうか？

[3] しかり、しかり、否、否であるべき

私は、ここでイエス様のお言葉を思い起こしました。あの山上の説教の中にある言葉です。「**あなたがたの言葉は、ただ、しかり、しかり、否、否であるべきだ。それ以上に出ることは、悪から来るのである**」(マタイ 5:33 口語訳)と。

このイエス様の言葉は、「**一切誓ってはならない**」という言葉に続いて語られている言葉です。その意味は、ちょっと乱暴な言い方になってしまうかもしれませんが、「あなたは“神賭けて誓う”などと言うかも知れないが、あなたは何さまですか、そんなに偉い方なのですか？ あなたは明日の命はもとより、髪の毛一筋でさえ黒くすることは出来ないではないか。だからあなたは誓うのではなく、ただ神様の言葉を受け取ればよいのだ」と言った意味だろうと思います。

そういうことを思うと、ヨセフの態度というのは、ブレていないのです。相手が誰であろうと、変な意味で「付度」しない。一貫して、神様の言葉(みこころ・御旨)だけを伝えることに自らの立ち位置をしっかりと定めていると思うのです。このヨセフの生きざまは、は他者の顔色ばかりを見て、態度がブレてしまいがちな者(=私自身)に対するメッセージだと思いました。—「**あなたがたの言葉は、ただ、しかり、しかり、否、否であるべきだ。**」とイエス様はおっしゃいました。

ヨセフのそのブレない姿勢、それは、常に神様の前に自分が立っている、という認識ですが、それが、自分の未来をも切り開くことに繋がっているのです。面白い

ですね、彼は監獄の中であって、心は鳥のように、地上（自分）ではなく上を仰いでいるのです。私が日本聖書神学校で、説教を学んだ菊池吉弥という日本基督教団・東京下谷教会の牧師だった先生がおられました（とても情熱的で、またいつも授業の前に学生の為に祈ってくださる先生でした）が、その先生の、『**山上の説教**』の説教集が新教出版社から出ていますが、そこで菊池先生はこの**マタイ 5:33~37**の説教の中でこのようなことを語っておられました。

「しかりをしかり、否を否と言う人間は、神によって自由にされた人間です。別の言葉で言えば、**神によってしっかりと把えられた人間**です。そして**神が、その人のうち**にあって、動かすことの出来ぬ確かさを持って生き生きと存在していることを体験している人間、そういう人間が、ぎりぎりのところでも、しかりをしかり、否を否と言うことのできる人間です」と。

[結] 「われ、ここに立つ」

今から 500 年前、あの 16 世紀のドイツに現われたマルチン・ルターは、ただ神様の言葉だけが私たちの救いの根拠なのだと主張して、それがプロテスタント教会誕生の発端になったのですが（私たちバプテスト教会もそのプロテスタント教会の一つの群れですが）ルターは、当時のウォルムスの国会に呼びだされて審問を受けたのです。あの 95 か条の提題は、当事の教会と社会に嵐を呼び起こしたからです。このまま放っておけないと。審問官が、ルターの山と積まれた書物を前に置き、「この書物に書いてあることを撤回するかどうか」と迫りました。その時のルターの本語は有名な言葉です。彼はこう言いました。

「私は、神のみことばに把えられています。私はそこに書いてあることが、聖書に照らして間違いだということが指摘されない限り、それを撤回するつもりはありません。**私はここに立っています**。神よ、私をお助け下さい」と。

ルターは、神様の前で、しかりをしかり、否を否と言ったのです。「**私はここに立っている=我ここに立つ**」。神様の言葉だけに私は立つのだと彼は言いました。それは自分がみ言葉に把えられているからなのだと。これは、み言葉に把えられていることを喜び、魂が自由になっている人の言葉です。「神の言葉こそ進みに進め」と、あの賛美歌「**神はわがやぐら**」の中でも歌われている通りです。

ヨセフは、「神が夢の解き明かしをされる」と言って、二人の役人の夢を解きましたが、解放された給仕役の長はすっかりヨセフのことを忘れてしまったのです。けれども、二年後に不思議にも、国王ファラオの夢を解くためにヨセフは牢から引き出されたのです。そして結果、ファラオはヨセフに驚嘆し、ヨセフを、国王に継

ぐポジションに置いたのです。あり得ないことが起こりました。そのことがやがて、自分を売った兄弟たちとの和解や、父ヤコブとの再会という出来事に繋がったのです。それはその時は思ってもみない事でした。

そう、思ってもみない事を神様は私たちにプランして下さっているのです。それは、あとで振り返らないと分からないことなのかも知れないと思います。けれども、私たちは、ただヨセフのように、苦しい中を通される時も、**神様のみこころ、み言葉、ご計画だけが必ずなる**ことに信頼して、与えられている信仰生活を誠実に歩んで生きたいと思います。先ほどの菊地先生は、「神の前にいつでも立ち続ける。そのことがいよいよはっきりしてゆくことが、**信仰生活が成熟していくこと**でありましょう」と語っておりました。

そして、この歩みとは、孤独な歩みではないのです。**この歩みの先頭としんがり**には、私たちの苦しみと弱さを知り、また、私たちの罪のために**十字架**にさえ架かって下さった**イエス様がいて下さる**のですから！ 神様の光が届かない私たちの人生の道はどこにもありません。

詩編の作者は言いました。詩編 139 編 11 節です。

「わたしは言う。闇の中でも主はわたしを見ておられる。夜も光がわたしを照らし出す」。

お祈り致します。